

記念切手のグラビアスクリーン（１）

永吉 秀夫

何度も繰り返し製造される普通切手と違い、原則として一度に全量を製造する記念切手(より正確に言えば、年賀切手などを含めた「特殊切手」)の製造面はバラエティに乏しく、面白くないと思われがちです。確かにそれは事実ですが、面白さが全くないというわけではありません。特に切手製造技術の発展期と重なった書状10円期(1952-66年)の記念切手には昨今の記念切手に見られない面白さがあふれていることを、拙著(注)の中で語らせていただきました。

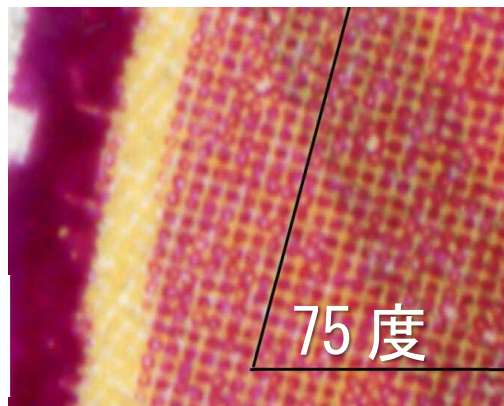
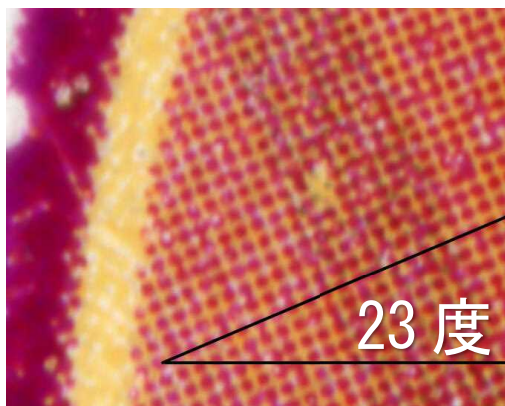
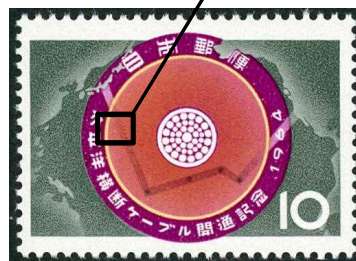
その面白さのひとつが、グラビア多色刷り切手のスクリーンです。グラビア印刷は版面上に規則正しく並べた凹みにインクを詰めて印刷する方式ですが、1980年代前半までのグラビア切手ではその凹みの形状は正方形で、多くの切手では印面に対して45度の方向に並んでいます。このような版面は網目の入ったフィルム(スクリーン)を用いて写真技術で作られたので、その凹みの並んでいる方向は**スクリーン角度**と呼ばれます。

グラビア印刷が多色化されたばかりの昭和30年代の多色刷り切手では、ある理由で色ごとに異なる角度のスクリーンが用いられました。それらの中には、少ないながらもスクリーン角度にバラエティのある切手が存在します。それらのうち、ルーペで見ただけで簡単にわかるバラエティについて、今後不定期で紹介していきたいと思います。

今回紹介するのは、拙著の表紙にも掲載した「太平洋ケーブル開通」です。この切手の赤紫色スクリーンには、ご覧のように顕著なバラエティが存在します。拙著では古い文献の記載をそのまま借用して「22度と78度」と書きましたが、きちんと測定してみると「23度と75度」とする方が正しそうです。

グラビアスクリーンの観察では、網目がつぶれていて角度測定が困難な場合も少なくありませんが、この切手の赤紫のスクリーンはまず間違いなく鮮明に見えます。角度の数値はともかく、両者を識別するだけなら倍率の低いルーペでも充分可能です。

拡大図→下欄



この2種のスクリーンはほぼ同数存在しているようで、無作為に数枚の切手を集めただけで簡単にスクリーン違いを揃えることができます。皆様もお手元の切手を調べてみてはいかがでしょうか。

注：郵趣モノグラフ 31『製造面から見た書状10円期の記念特殊切手』（永吉秀夫、日本郵趣協会 2020年）